河の流れのきよきこゝ
群きて遊べわか友よ
男女のけじめなく
うれしく遊べ今日の日を

黑澤登幾子傳補遺（つゞき）

下村三四吉

○登幾子が京都に送られし後、牢屋敷役所の白洲にて糺問を受けたるときの次第につきては、……頃は卯月の十四日、始めて京都御白洲へ召出さる、尤も牢屋敷の御役所なり。白砂の上荒莚をしきたる上に引居らる。彼の座に平伏す。顔を上げよと聲の下、ハツト答へて顔上ぐれば御役所に並居たる御方々七八人、吟味方と見えけるは手島敬之介殿、年のころは三十路と覺しき當りまでの黑羽二重に、紋付上下の着こなしぶり、さすが吟味の役方と撰び出たる吟味の達者、いたわり役と見えけるは加納繁三郎殿、年の比五十路とおぼしき、同じ裝束、寛仁大度のりつぱのこつがら、實に博學とぞ見へにける、聞役には鹽津庄藏殿、年のころ四十路あまり、同じ裝束、りつぱのこつがら、役所の眞中に坐してもくねんとして物いはず。其外同心の面々には、大河原重藏、平塚兵次郎、上田直之丞殿其外姓名を覺えざる方々三人づゝ筆を取て申述ぶる言を記されける。手島氏の曰く、其方婦人の身として一人にては參るまじ、つれの者は何くにある、有体に申されよ、其方は先達て烏丸扇屋庄七方に宿りて北野の社へ詣で、之れより慶圓坊へ相尋ね、東坊城家へ歌學入門の願を致

し、それより座田右兵衛方へ案内致され、天満宮御遺誡の書を相尋ね、其外歌學入門の願ひを頼み入れ、樣々の物語の内に議論など致し候由に承はりしが、歌學の入門とは僞り、實は水戸殿御慎の御儀につき申し開かんそのために、彼の長歌をつゞりて出來りしは、是れ御簾中樣の御名代ならん、またつれのものは何くにあるかハイ〳〵左樣なものではござりませぬ、いかよふに仰せられても私事は一人にて參りしに相違ござりませぬ。コリヤ其方はな、水戸殿御簾中樣よりの御使じやな、シテこの長歌は外につくりしものあるべし、何人にたのまれた、サヽ有体に申されよ、申さねばそのまゝにはすまぬぞよ。ハイ何よふに仰せられても、全く以て、一人にて候。恐れながら申し上げます。このたび私儀婦人の身として上京致し候事一通り申上げ奉らん、哀れ御聞きとゞけたまはれかし。その子細は、去七月中邦君前の中納言樣御慎みの御儀に付きいかなる御咎有らせられかゝる罪科には落入らせたまひしかと存じ、下ながら恐入り奉り、共に慎み居り候處……（中略）……老母と申合せ、恐多くも一天万乘の君の御一大事を承りましては、婦人にても聞捨にはなりがたし、ことに前の中納言樣御慎みの御儀も只ならぬ御事と存じ、兩三人に問ひ合せ候へば、全く以て無實の罪に落入らせたまひし由たしかに承はり候へば、やむことを得ず、上京に決心に相成り、老母の方へ留守居をたのみ、二月二十二日國元を發足いたし、道中すがらの艱難苦心言葉にも述べがたく、御推量下されかし。殊

に將軍家御幼年の御事なれば、かゝる無道を行ひたまふは全く井伊樣なり、古の太政大臣清盛公の如く、御幼君を立ておき、ほしいまゝの行ひをなしたまふかと存じ、さ候へば、將軍樣の御身の上も氣ゴかはしく存じ、誠に御三公（天皇將軍藩主をいふ）の御爲め、天下の御爲め、これまで泰平の御恩德を蒙り安穩にすぎはひ致し候へば、御報恩の爲めかくまで丹誠をこらし候へども、大海の一滴、九牛が一毛なり、愚婦が誠心哀れ御聞とゞけたまはらば、我が身一つは何樣の御政事を蒙り候とも聊かもいとひ御座なく候と。子細曲に申し述べければ、役所の方々御聞きとゞけありて、サテ其方は誠に忠臣なるものなり、さりながら恐多くも朝廷の儀は附けたりであらふ、誠は中納言樣御慎の御儀を歎き出で來るからは、とりもなをさず御簾中樣の御使御宮使を致して參りしに相違あるまじ。……（中略）……これは又存じもよらぬ御仰せをきくものかな、恐れ多くも十善天子の御爲め、邦君の御爲め、天下の御爲め、我いやしくも身命のつゞくだけ申し開かんそのためにはせ上り候と申し上ぐれば、ヲヽ其方婦人の身として天下國家の御爲めなどゝは古來聞き傳へにもなき事なり、餘りとや恐れ多き御事にはあらずや。ハヽ恐多くは存じますれども、我朝にては古來より御例なしと仰あれども、唐にては齊の宣王の時、鍾離春無鹽君などは天下の危きを見ては自から天上へ言上し奉りし例もあり、恐多くも一天万乘の君の御一大事承りましては聞捨てにはなりがたし、易に曰く、其天子は民の父母たり、下民の

王たり、詩に曰く、普天の下王土にあらざるなく、率土の濱王臣にあらざるなしと、我苟くも仁義の道を守り、天爾己に備りますれば、天下の御大事を承りましては聞捨てがたく罷り出で候事若し心得違ひに候はゞ、如何なる御咎を蒙り候ともいとひ御座なく候、……只々天下國家の御爲め、邦君の御愼み御開さになさせられ候はゞ本懷の至りに候、すみやかに御聞さどゞけたまはらば、廣大の御慈悲と奉存上と申上ぐれば……其日の役所は下げられたり。

（此項未完）

○前號正誤　四十頁十四行運合の傍訓は（つれあひ）とあるべし、配偶の意なり、また四十三頁二行（つゝみの庭の道）はつゝみの夜の道の誤

偉人の學校時代（一）

ノーフォルクのチルソン

米溪

ホレシオ、ネルソン、生れながらにして、活達敏捷、愛憫の情深く、又、高潔なる心性を有せりしかば、卯角相集まりて嬉戯するに當りては、擧措自から、嶄然群を抽けり。彼はエドマンドとカザリンチルソンとの間に生れたる第五男にして實に其の第六子なり。紀元一千七百五十八年ノーフォルクの片田舍の村里、バーンハム、ドープに於て生る。父時に、其の地の監督牧師にして、家は即ち、寺院の一舍なりき。

母は、少時は、サックリングと云ひ、其の祖母は、サーロバート　ワルポールの姉なりしかは、チルソンの名も、後に、其の敎父の命ずる所にし